

マーシャル諸島に強制動員された朝鮮人の「玉砕」と「叛乱銃殺」

竹内 康人

はじめに

- 1 ケゼリン・ルオットでの集団死・「玉砕」の実相
- 2 ミリ環礁への朝鮮人の強制動員と抵抗・「叛乱銃殺」

おわりに

はじめに

本稿では、太平洋のマーシャル諸島に強制動員された朝鮮人のケゼリン環礁での「玉砕」とミリ環礁での「叛乱銃殺」の実態についてみていく。

日本政府は 1937 年に中国への侵略戦争を拡大し、翌年に国家総動員法を制定するなど総力戦体制をとった。企画院は労務動員計画を立て、朝鮮半島から日本への動員を計画し、1939 年から 45 年にかけて、集団募集・官斡旋・徴用などさまざまな名目で朝鮮からの労務動員をおこなった。朝鮮から日本各地に労務で動員された人びとの数は約 80 万人である。また軍人軍属などの軍務動員は 1938 年から始められ、約 37 万人をアジア・太平洋各地に動員した（動員数は竹内『戦時朝鮮人強制労働調査資料集 2 増補改訂版』）。

南方には軍要員として約 3 万 5000 人の朝鮮人が動員された（「軍要員送出労務員数調」『日本人の海外活動に関する歴史的調査 通巻第 10 冊 朝鮮編 9』85 頁）。その多くが海軍による工員（労務者、軍属）での徴用であり、軍事基地建設に動員された。ここでみるマーシャル諸島への朝鮮人の動員も海軍による徴用である。それは意思に反する軍による動員であり、連行現場では戦争の前線での労務を強制され、逃亡すれば銃殺処分されるというものだった。

2011 年から厚生労働省社会・援護局が保管する戦没者等援護関係資料の国立公文書館への移管がすすめられ、公文書館に申請すれば審査を経て公開されるようになった。厚生省は援護関係資料の朝鮮人分は移管していないが、移管資料には朝鮮人の記載を含むものもある。

すでに日本政府から韓国政府に援護関係資料の朝鮮人分が渡されている（陸軍留守名簿や海軍個票は 1993 年）。2004 年に設立された韓国政府傘下の日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会が一時期、公開したが、委員会解散によって閲覧できなくなっていた。韓国の国家記録院は強制動員関係名簿の 2023 年の公開に向けて作業をすすめ、Web サイトの強制動員検索のページから動員者の

氏名や本籍などを打ち込めば、陸軍留守名簿や海軍軍属身上調査表（海軍軍属履歴原表）などの名簿類を閲覧できるようにした。

筆者は『調査・朝鮮人強制労働③』の第8章「南太平洋への連行」でマーシャル諸島などへの朝鮮人軍属の連行や全羅北道からラバウルへの連行について記し、第10章では海軍軍属の南洋への動員数について言及した。以下の文章は強制動員された朝鮮人の名簿類の公開の進展を利用し、これまでの調査を補足するものである（文中敬称略）。

1 ケゼリン・ルオットでの集団死・「玉砕」の実相

日本海軍は南洋諸島を支配するために第4艦隊を置いた。第4艦隊は第3から第6の根拠地隊を置き、第3根拠地隊はパラオ諸島（パラオを拠点）、第4根拠地隊はカロリン諸島（トラックを拠点）、第5根拠地隊はマリアナ諸島（サイパンを拠点）、第6根拠地隊はマーシャル諸島（ケゼリンを拠点）を担当した。

アジア太平洋での侵略戦争の拡大によって海軍は南洋諸島で飛行場建設や軍港の整備をおこない、マーシャル諸島ではケゼリン（現在の呼称、クワジェリン）、ウォッゼ（現、ウォッジェ）、ミレ（現、ミリ）、ブラウン（現、エニウェトク）などに飛行場を建設した。その工事を海軍の施設部隊が担い、そこに朝鮮人が動員されたのである。南洋での施設部隊員は朝鮮人が多数を占めた。

第4艦隊が管轄する地域への労務者の動員は東京の芝浦補給部が担当した。動員されると第4艦隊下の第4施設部（建築部）に編入された。呉や佐世保などからも設営隊が組織され、南洋に動員された。第4施設部の組織変遷をみておくと、1940年12月に第4艦隊の下に第4建築部が編成され、43年8月に第4施設部へと名称を変更した。この第4施設部に人員や設備を送った部隊が41年6月に編成された第4建築部芝浦支部であり、43年4月に芝浦補給部へと名称を変更している。

(1) ケゼリン環礁の拠点化と陥落

日本軍は海軍の第6根拠地隊司令部をマーシャル諸島の東南にあるケゼリン環礁に置き、マーシャル諸島の拠点とした。ケゼリン環礁のケゼリン島とルオット（現、ロイとナムル）島には第4施設部の派遣隊が飛行場などを建設した。ここにも朝鮮人が動員された。

ケゼリンには海軍の第6根拠地隊をはじめ、第61警備隊、第6通信隊、第6潜水艦基地隊などが置かれ、気象隊、軍需部、運輸部、施設部などの部隊もあった。荷役の山九組300人などもふくめ、海軍関係の人員は約4,100人を超え、そのうち軍人は2,700人ほどだった。陸軍部隊は海上第1機動旅団や南洋第1支隊など1,000人ほどが配置された。ルオットには海軍の第24航空戦隊、警備隊や施設部の派遣部隊、航空廠など2,500人ほどが配置された。アメリカ軍は1943年11月にマーシャル諸島の南、ギルバート諸島のタラワ・マキンを占領し、続いてマーシャル諸島の拠点ケゼリンの占領を準備した。アメリカ軍は1944年2月1日にルオット（ロイ）、同3日にナムル、同5日にケゼリンを占領した。（戦史叢書62『中部太平洋方面海軍作戦〈2〉——昭和17年6月以降』600-605頁）。

日本では、2月6日にケゼリン・ルオットの陸海軍部隊4,500人が玉砕、軍属2,000人も運命

を共にしたと報道された(NHK日本ニュース196号, 1944年3月1日検閲合格)。ここでの軍属2,000人には朝鮮人軍属が含まれている。「玉砕」とは忠義や名誉のためにすすんで死ぬことであり、死を美化する用語である。だが、朝鮮人は「玉砕」してはいない。

(2) 「半島工員クェゼリン・ルオット玉砕者名簿」

厚労省社会・援護局から国立公文書館に移管された海軍死没者原簿のなかに「半島工員クェゼリン・ルオット玉砕者名簿」(1冊)がある。半島とは朝鮮半島の略であり、この史料は芝浦補給部からクェゼリン方面(第4施設部)に動員された朝鮮人の死亡者名簿である。

死没者の個票は、供出県、職名、任地・番号、採用年月日、死亡年月日、転傭月日、氏名、生年月日、本籍、現住所、戸主名、遺族名、死亡状況、人事部確認、死亡公表月日、扶助料、合祀手続などを記入するようになっている。個票からは、いつ、どこから、だれが動員され、いつ死亡し、どう死が伝達されたのか、遺族の状況や死亡に対する扶助料の実態などがわかる。この名簿では、職名は「土工」であり、それは海軍徴用の労務者を示す。名簿には全員の氏名が記された索引が付いている。

名簿は2部に分かれ、前半はクェゼリン分、後半はルオット分である。ルオット分の後半途中からウォッジェ、クサイ(現、コラスエ)、トラック(現、チューク)への転送者が入り、さらに最後にクェゼリンの動員者が追加挿入されている。ルオット分の名簿にはウォッジェ、クサイ、トラックなどに転送されていることは記載されていないため、記載された人びとがルオットでの死亡者の記載のようにみえるが、名簿登載者を「海軍軍属身上調査表」と照合すると転送先が判明する。

(3) 朝鮮半島各地からクェゼリンに強制動員

この玉砕者名簿から動員された朝鮮人の出身郡と派遣先をみてみよう。

クェゼリンへの動員者は387人が掲載されているが、1946年1月にゼネラルランド号に乗船して浦賀に到着した生還者など93人が赤い斜線で削除されており、死者は294人となる。1942年2月に全南霊光郡、咸平郡、長城郡、全北茂朱郡、京畿江華郡、漣川郡、安城郡、抱川郡、広州郡、龍仁郡、驪州郡、利川郡から動員されている。さらに1943年3月に忠南礼山郡、43年6月に慶南密陽郡から動員されている。

クェゼリンからルオットへの配置者は77人が掲載され、生還者23人を除くと死者は54人である。1942年2月に全南咸平郡、京畿安城郡、龍仁郡、利川郡、驪州郡から動員された。

クェゼリン環礁の右方にあるウォッジェへの転送者は46人が記され、そのうち生還が34人、死亡・不明が12人である。1942年8月に慶北達城郡、漆谷郡から動員されているが、なかには銃殺された者もいる。ウォッジェには慶北達城郡、漆谷郡以外の郡からも動員されている。「被徴用死亡者連名簿」の記載から、全南莞島郡、珍島郡、済州島、慶北金泉郡、慶山郡、星州郡などからも動員されていることがわかる。「被徴用死亡者連名簿」とは1971年に日本政府から韓国政府に渡された朝鮮人軍人軍属の死亡者名簿(「旧日本軍在籍朝鮮出身者死亡者連名簿」)である。

クェゼリンからマイクロネシアのクサイへの転送者は162人が掲載され、うち生存が158人、死者

は4人である。1942年8月に慶北尚州郡、聞慶郡、醴泉郡、安東郡、榮州郡から動員されている。また、クェゼリンからミクロネシアのトラックへの転送者5人も挿入されている。かれらは43年6月に慶南の密陽郡から動員されている。当初の動員先がクェゼリンであるためにこの名簿に掲載されたとみられる。

このようにみると「半島工員クェゼリン・ルオット玉砕者名簿」に掲載された約700人の朝鮮人のうち、クェゼリン・ルオット関係者は463人であり、このうち死者は347人、生存が116人である。多数が死亡したが、「玉砕」（全員の死亡）ではなかったことがわかる。

名簿からは、天皇制の支配的思想に服従するのではなく、生存しようとした意思、帰郷への熱い想いを感じる。軍部の検閲を経ての「軍属2,000人も運命を共にした」という当時の報道は偽りである。アメリカ側の記事では日本軍5,000人のうち125人の朝鮮人労働者と49人の日本人が生き残ったとする（アメリカ太平洋陸軍U.S.Army PacificのWebサイト）。

なお、この名簿には玉砕の日とされる1944年2月6日以前の死者については記載されていない。この地域での全ての死者を知るには「被徴用死亡者連名簿」との照合が必要である。「被徴用死亡者連名簿」には氏名の誤記があるため、「海軍軍属身上調査表」との照合も必要となる。

（4）ウォツジェ朝鮮人銃殺事件

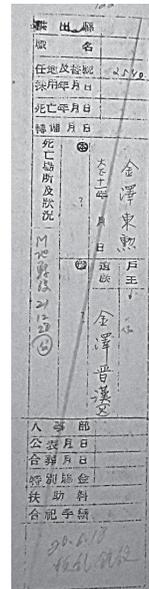
「半島工員クェゼリン・ルオット玉砕者名簿」のルオット分に、住所未記載の金澤東勳の記事があった（【写真1】）。その備考欄には「20.6.18 叛乱銃殺」の書き込みがある。死亡場所及状況の欄には「M地戦没 21.12.28 公」と記されていた。Mはマーシャル、公は公報の略である。平山鉉泰、張本忠男の備考欄にも同様の記事があり、平沼大道は「叛乱銃殺」と「21.1.3 ゼネラルランド帰還」の両方が記され、慶本達昇も「叛乱銃殺」と「帰還」の記事がある。金澤東勳に関して「海軍軍属身上調査表」と「被徴用死亡者連名簿」で探し、ウォツジェで死亡していることが判明した。

海軍身上調査表をみると銃殺された者の欄には「19年中期より糧食の逼迫甚しく逃亡通敵者を生じ20年4月1日以降防備部隊長指揮官海軍少将吉見信一の命により銃殺処刑された。4施本部と連絡不能のため報告せず（ウォツゼ島工事主任官技大尉加藤恒雄報告）」と記されている。銃殺の記事の横には「自殺」「普通死」などと実態を隠す用語が書き加えられていた。

日本軍はウォツジェ環礁にも飛行場を建設するために施設部隊を派遣した。施設部の工員の多くが朝鮮人であった。ウォツジェに動員された土屋太郎（第552海軍航空隊、第64警備隊）の調査資料によれば、第4施設部の日本人は戦前は40人であり、1944年3月時点で38人、45年10月には4人となり、朝鮮人の施設隊員は「愛国団」（海軍作業愛国団）として約520人が動員され、44年3月時点で480人、45年10月で346人とされる（稲毛三郎『飢餓の島 ウ島戦夢物語』17頁）。

クェゼリンの陥落後、ウォツジェはミリと同様、アメリカ軍は上陸せず、空襲と飢餓のなかで、上官殺傷事件、窃盗や自殺、人肉食事件などが起きた。そのなかで朝鮮人は団結して食糧増産に励み、その死亡率は低かったようだ。

土屋太郎は『ウォツゼ島 籠城六百日』で次のように記している。朝鮮人の大部分は優秀で団結心が強かった。糧食が欠乏し、道義が地に堕ち、軍人たちもみな利己主義に陥っていた時、彼らは決してお互いの団結を失わなかった。20か月にわたる籠城生活で、朝鮮人の死亡率が最も少なかった。



【写真1】左 半島工員ケゼリン・ルオット玉砕者名簿（国立公文書館蔵）
右 下備考欄には「叛乱銃殺」の記載

た原因の一つがよく団結した糧食増産にあった。終戦で引き上げる際、配船の関係で彼らは後回しになったが、我々が先に帰るときに栈橋まで見送りに来た。ウォツジェでは逃亡などで行方不明となった者は130人ほどであり、施設部隊員が多かった。海軍軍人の逃亡は40人ほどだった。ウォツジェでは1945年2月下旬、逃亡する者はすべて銃殺にする通達が出された（82頁，84-85頁）。

ウォツジェでの施設部の朝鮮人銃殺者について、「被徴用死亡者連名簿」と「海軍軍属身上調査表」の記載を調べたところ、1945年4月、全南珍島郡出身、昌山壽煥、永井台律、45年6月、慶北漆谷郡出身、金澤東勲、張本忠雄、45年7月、慶北漆谷郡出身、平山鉉恭、慶北金泉郡出身、松原来林の6人が判明した。

北島秀治郎（海軍第64警備隊主計長）は「ウオツゼ島の惨状」（『思い出 海軍と人と海軍主計科短現7期文集』）で、餓死者の続出や人肉食行為への処罰の体験をふまえて、絶海の孤島は「地獄絵そのものに変貌」し「飢餓の島」となり「餓鬼」を生んだ。戦傷死が戦死扱い、戦病死・餓死が戦傷死扱い、事故死が戦病死扱いに、と記す。

このような処理基準によって銃殺処理は「死亡」と公報されたのだろう。

海軍の施設部に動員された朝鮮人は、飢餓と空襲のなか、逃亡者は銃殺するという海軍の監視下での生を強いられた。銃殺は遺族に伝えられず、遺骨も返還されなかった。給与も処理済みとされており、供託金はない。

濟州島からウォツジェに動員された李共石は手記「歴史の裏側から マーシャル群島ウオツゼ島での九死に一生」（韓国・日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会『南方紀行』2008年）を残している。李は1942年6月末に動員されて飛行場建設の労働を強制された。この手記には動員された朝鮮人が労働を強制され、空襲や艦砲射撃、飢餓のなか、帰郷を願って生き続けた姿が描かれている。

李共石は暴力的管理による労働の強制について次のように記している。日本人の労務監督はやく

ぞ出身であり、その性格が荒くて下品な言葉を使い、朝鮮人に対する態度は日本人が主人であることを誇示し、完全に奴隷扱いした。我々朝鮮人が少しでも目に障ると、叱ると同時に必ず往復ビンタが行き来した。少しでも怠けたように見えると、気持ちを变えてやるというて、20～30発殴りつけた（要約、信長たか子訳、『南方紀行』31-32頁）。

(5) 「半島工員大宮島玉砕者名簿」

当時日本はマリアナ諸島南端にあるグアム島を「大宮島」と呼んでいた。朝鮮人単独の玉砕者名簿としては「半島工員大宮島玉砕者名簿」（1冊、国立公文書館）がある。この名簿には第5海軍建設部大宮島支部の96人が掲載されている。生還者が41人あり、死亡者は55人である。当時は全員死亡と判断して「玉砕者名簿」とされたが、4割ほどの生還が判明したわけである。この名簿からも動員された朝鮮人の生存への意思が感じられる。

第5海軍建設部は第4施設部の下で編成され、1944年2月23日にグアムに一部が動員された。出身地は全南の宝城郡、順天郡、谷城郡、求礼郡、麗水郡と江原道の華川郡、通川郡などである。動員から半年後の44年8月10日に死亡と処理されている。第5海軍建設部大宮島支部の業務は「グアム島各海軍部隊戦闘状況」（グアム島海軍部隊残務整理班、1947年）によれば、糧食増産であり、戦況によって陣地増築や沿岸警備、糧食輸送にも動員された。

1944年4月に呉からグアムに派遣された第217海軍設営隊にも多数の朝鮮人が動員され、グアムで集団死しているが、この簿冊には含まれていない。第217海軍設営隊の主な業務は飛行場建設だった。

「四施生還者関係」（1冊、国立公文書館）には、クェゼリン、ルオット、タラワ、マキン、サイパン、ベリリュー、ブラウン、ウエーキ、ニューギニア、艦船などで死亡と処理されていたが、生存が判明した者が記されている。朝鮮人も多数、記載されている。「玉砕」と処理されていたが、実際には生きて帰郷できた者がいたのである。

日本軍が朝鮮人軍属を監視対象としていたことは、1943年11月のギルバート諸島のタラワ・マキンへのアメリカ軍の上陸時、日本軍がマキン島にいた朝鮮人軍属200人の「不穏な動き」を警戒して小さな弾薬庫に押し込めたことからわかる。だがそれが幸いし、104人が生き残った。日本軍約700人のうち生存者は1人だった。タラワ島では朝鮮人軍属129人が生き残った。日本軍4,600人のうち捕虜となったのは17人だった（佐藤和正『玉砕の島』51頁、81頁）。

アメリカ軍の写真に「タラワで負傷した朝鮮人労務者」があるが（韓国国史編纂委員会 Web サイト）、「四施生還者関係」からはタラワ、マキンで生存していた朝鮮人の氏名が判明する。

2 ミリ環礁への朝鮮人の強制動員と抵抗・「叛乱銃殺」

では、つぎにマーシャル諸島のミリ環礁への強制動員とそこでの抵抗についてみよう。ミリ環礁はマーシャル諸島の東南、ハワイとニューギニアの中間点に位置している。日本軍はクェゼリン島とともにミリ島を拠点とし、飛行場を建設した。

このミリ環礁へと飛行場建設部隊として動員された朝鮮人は全羅南道出身者が多かった。アメリ

カ軍による攻撃が激しくなり、食糧の補給が途絶えると、日本軍はミリ環礁の島々に分散配置した。アメリカ軍による脱出や投降の呼びかけが強まるなか、チルボン島に分散配置された朝鮮人が1945年3月、日本軍に抵抗して脱出しようとした。しかし日本軍の攻撃により銃殺や自死を強いられる事件が起きた。

(1) 研究と史料

1) 先行研究

ミリ環礁での朝鮮人反乱に関する証言がリン・ポイヤー、スザンヌ・ファルグート、ローレンス・マーシャル・カルッチ『戦争の台風 太平洋戦争でのマイクロネシア人の経験』(ハワイ大学出版、2000年)に収録されている。エルソン・エベル(Elson Ebel)の証言によれば、チルボン島のマーシャル人と朝鮮人は窃盗を口実とした朝鮮人4人の処刑を契機に共同して闘争に立ち上がった。深夜に日本人の宿舎を襲って殺したが、ルクノール島に逃げた者がいた。日本軍は機関銃や小銃で武装して襲来し、マーシャル人と朝鮮人を殺した。戦闘の間に脱出できた朝鮮人もいたという。また、エベルはマーシャル人が首を斬られて処刑された事例についても話している(226-228頁)。証言によれば、チルボン島の事件はマーシャル人と朝鮮人による共同の闘争であった。この事件は日本によるマイクロネシア支配の終わりを予感させるものだった。

韓国でのミリ環礁への強制動員と抵抗に関する研究には、尹ジョンイル・金銀植「太平洋戦争末期、マーシャル諸島の日本軍の現況と朝鮮人軍属の実態 ミリ島朝鮮人虐殺事件を中心に」(民族問題研究所、2007年、強制動員被害真相糾明委員会による研究委託報告書)があり、ミリ島事件での証言や資料などを整理、日本の「海軍軍属身上調査表」の分析を課題としてあげている。

この報告をふまえ、真相糾明委員会の後継団体である強制動員被害調査支援委員会は『南洋群島ミリ環礁で虐殺された強制動員朝鮮人に関する真相調査』(曹健、2011年)を作成、「海軍軍属身上調査表」を分析し、抵抗の実態をとらえようとした。この調査にアメリカ軍の資料(救助された朝鮮人の写真や捕虜名簿)を加えて再論したものが、曹健「アジア太平洋戦争末期ミリ環礁動員朝鮮人の抵抗と被害」(『崇実史学』47、2021年)である。

ハワイと韓国での研究をふまえてオカ・デスは「ミリ環礁の蜂起と虐殺に関する歴史的保存評価」(2024年)で次のように言う。1945年3月のミリ環礁チルボン島での蜂起は日本軍支配に対する朝鮮人とマーシャル人による抵抗であり、蜂起後、日本軍の報復を怖れて逃亡が増加した。マーシャル人の一部はミリ環礁から西方のジャルト(ヤルト)環礁に逃亡したが、日本軍により反乱煽動、スパイ容疑で虐殺された。ジャルトで殺されたのは8人であるが、10歳の子どもが含まれている。このジャルトの事件はアメリカが戦争犯罪として処罰し、ミリではアメリカ兵捕虜の殺害が処罰されたが、ミリでの朝鮮人などの虐殺については処罰がない。

オカはアメリカの国立公文書館で資料調査を行い、その所在をこの論文で紹介するとともに、海軍による朝鮮人救出写真、反乱後に作成されたミリの人口地図、森住卓撮影のミリを再訪した韓国人動員被害者の写真などを掲載した。そしてチルボン島を戦時の蜂起と虐殺の現場として歴史保存する必要性を述べた。

榴弾やダイナマイトを入手し、隠していた。17日、夜明けと共に日本軍は300人ほどで襲来した。朝鮮人は島内に散らばって抵抗し、アメリカ軍の哨戒機に向かって白旗を振った。このさなか朝鮮人と先住の島民が殺された。負傷した朝鮮人100人は数人ごとに自決した。日本軍はとらえた朝鮮人を連行した。哨戒機を見た日本軍は日没前に撤収した。朝鮮人や島民で小島などに逃走して生き残った者たちは3月18日にアメリカ軍の艦艇に救出された。抵抗した朝鮮人約190人のうち救出された者は67人だった。

「Maleolap 1945-1948」所収史料には、ミリやウォッジェでの朝鮮人と日本人の捕虜名簿が含まれている。英文のBoku, Sankeiは朴三圭, Nobohara, Mankichiは宣原萬吉, Teimoto, Fushokuは鄭元富植などと判断できる。英文名簿の解説により、ほかにミリ関係者の金川安翼, 光山南辰, 山村永熙, 文平炳煥, 金山点洙, 松本東熙, 海本俊泳, 金山東順, 泉原鐘免, 米原在信, 石本信鐘, 玉川正南, 徳山炳大, 文炳鶴, 安本京來, 金井吉鳳, 高在哲, 金田在屋, 金永權, 松山正彩, 鄭田萬均, 朴田鍾欝, 朴村勝圭, 大川寛鎮などの存在を捉えることができる。

「海軍軍属身上調査表」と照合すれば、出身地が判明する。ここに示した朝鮮人は「海軍軍属身上調査表」では1945年6月逃亡と処理されているものが多い。

アメリカ軍の史料には捕虜とした際に作成した「俘虜名票」がある。脱出に成功した李仁申の個表からその様式がわかる(『南方紀行』190頁)。そこには顔写真が貼られ、指紋が取られ、名前、性別、生年月日、本籍、身長、体重、目や皮膚の色、逮捕場所、健康状態などを書く欄がある。

アメリカ軍はハワイに捕虜収容所を設置し、ミリをはじめ南洋などで捕虜になった朝鮮人を集めた。その帰国に際して作成された名簿が「ハワイ収容者名簿」(『自由韓人報』第7号付録, 1945年12月)であり、ミリ関係者の氏名と住所も収録されている。

韓国・強制動員真相糾明委員会による「ハワイ収容所における韓人捕虜に関する調査」(2008年)の付録には、ハワイ収容者名簿から、尹聲鉉(木村聲鉉, 康津郡道岩面出身)現地逃亡, 尹項鉉(伊村項鉉, 康津郡道岩面出身), 趙沃濟(巴山忠一(推定), 高興郡南陽面出身)現地逃亡, 姜信鍾(石本信鍾, 谷城郡三岐面出身)現地逃亡, 1945年6月捕虜, 呂河鉉(咸呂河鉉, 谷城郡火面出身)現地逃亡, 1945年5月捕虜などを収録している(日本語版77-79頁)。

「ウオツゼ・マロエラプ・ミレー及びジャルートに対するアメリカ軍の作戦」(米国戦略爆撃調査団報告, 1947年)にはアメリカ軍の攻撃での被害状況と日本軍の捕虜(佐官・尉官)への尋問記録が収録されている。尋問記録には施設隊員数の記事もある。

4) 日本人兵士の証言

精神科医であり、作家でもあった式場隆三郎は『地獄島 兵士の敗戦記録』という小冊子を出版した(文苑社, 1946年)。この本はミリやウエーキなどの島々に送られた日本人兵士の手記をまとめたものである。そこに収録された「ミレー島日記」には、1945年3月にゼルボン(チルボン)島分遣隊の朝鮮人が暴動を起し、失敗して130人が自殺, 処刑された。それ以来米軍の船に逃亡の気配があるものは銃殺せよと志賀司令官の命令が出た。チャパノール島, バル島にいた朝鮮人70人に逃亡の気配があり、これも銃殺されたという記事がある(13頁)。

日本兵による記録や文集にも朝鮮人に関する記録がある。

『ミレー島回想録集 平和の鐘鳴る島』（同書編集委員会、1976年）には、海軍施設部隊の動向を記した田中計三郎・服部勇五郎（第4海軍施設部隊）「ミレー島と設部隊」、朝鮮人軍属の集団逃亡事件についても記した末村良雄（陸軍歩兵第107連隊第3大隊員）「ミレー島夜話」などが収録されている。

そこで末村良雄は次のように記す。彼らは「ヨボ」と呼ばれ、施設部の中でも最下位的な存在であった。遠くの島で現地自活をしていた一団が戦況全般も島の食事情も悪化してゆくばかりのところへ、米船からの投降呼びかけの放送や空からの投降宣伝ビラ等に刺激され、看守の日本人全員を殺害し集団逃亡する事を計画中、事前発覚し、海軍の兵隊や施設部の軍隊経験者で編成された討伐隊により鎮圧された事があった。日本人ですら日本人であることを忘れる者の多い時に、日本人になって間もない、しかも常日頃、侮辱的に扱われる^(ママ)朝鮮人が、日本人であることを忘れるのは当然であるように思えた。彼らの同胞愛は私たち日本人以上のもので、その助け合いの精神は極限にきてはじめてその真を証するに十分であると思った（要約、166頁）。

このように末村は、部隊での朝鮮人への差別や侮辱とそのなかでの同胞愛と相互扶助を指摘し、集団逃亡事件の存在についても言及している。

堤亨編『ミレー島戦編集録』（1988年）にはミリでの戦闘経過、海軍施設部隊の配置・分散配置などの記事があり、アメリカ軍による宣伝ビラも収録されている。

木村喜左エ門『ミレー島戦私記』（陸軍歩兵第107連隊第3大隊員、1973年）には、「一人の^(ママ)半島人の口から、アーナツカシキ故郷へ帰りたいたいー朝鮮なまりの声を聞く」とあり、朝鮮人が朝鮮総督府による徴用を受けてきた優秀な青年たちであり、建設の任務を果たしたうちは帰国したいのは十分わかると記している（44頁）。

「証言記録 兵士たちの戦争 飢餓の島 味方同士の間 金沢 歩兵第107連隊」（2009年11月9日、NHKアーカイブス）には、駒井藤吉、小川力松、常山多喜雄、中蔵信らの証言がある。ここでは飢餓の中での日本兵同士の殺し合い、上官の殺害、餓死や人肉食などが証言されている。朝鮮人についての言及はないが、飢餓の実態を知ることができる。

（2）ミリに動員された朝鮮人の証言

1) アジア太平洋戦争韓国人犠牲者補償請求裁判

1990年代に入ると、強制動員被害者が日本で裁判を起こすようになったが、「アジア太平洋戦争韓国人犠牲者補償請求裁判」（1991年12月提訴）の訴状には、ミリに動員された朴鍾元（光山郡河南面出身、動員時、潭陽郡大田面居住）、文炳煥（長興郡長平面出身）、遺族の高允錫（父の高在龍は光山郡大村面出身）の証言がある。

証言では、朴鍾元はチルボン島での抵抗闘争の生存者であり、高在龍はチルボン島での抵抗に参加し、自死を強いられたという。海軍軍属個表では高在龍は反乱に加わり米艦に逃亡と処理されているが、帰郷していないことから、実際には自死を強いられたとみられる。

在韓軍人軍属裁判の資料（2001年6月提訴）にも記録がある。陳述資料によれば、羅鍾徳、李鳳宰、李春宰はともに羅州郡文平面出身、それぞれ1944年2月に戦病死、44年12月に戦死、45年7月に戦死した。姜聖圭は求礼郡光義面出身で44年5月に戦死した。鄭大植は谷城郡兼面出身

で45年5月に戦死した。

李鳳宰の子の李鐘運は陳述書に次のように記す。父はわたしの出生直後の1942年3月に徴用された。その後は父から連絡はなく、母子は二人きりで苦痛の月日を送った。母はわたしを食べさせるために様々な仕事をしたが、朝鮮戦争後の混乱の中で生活は苦しく、わたしを孤児院に預けて再婚した。わたしには両親の恩恵がなく、無一文だった。小学校を卒業できず、安定した職にもつげず、日雇いの建築労働で暮らしてきた。父の記録を調べると44年12月14日に戦死し、57年に靖国神社に合祀されていた。未払金は6,672.8円が供託されていた。遺骨は48年2月3日に送還されたことになっていたが、受け取ってはいない。

李鐘運はこのように記し、日本政府が真相を究明し、公的な謝罪と賠償をし、未払金を返還し、靖国神社への合祀を撤回し、遺骨を遺族に返すことなどを求めたのである。

2) 光州千人訴訟でのミリ動員者

光州千人訴訟(1992年)の原告にもミリへの動員者25人ほどが含まれている。

動員された者は、姜永培(海南郡、死亡)、金碩祐(海南郡、捕虜帰国)、金仲鎮(海南郡、捕虜帰国)、李昌秀(光陽郡、銃殺)、尹炳煥(康津郡、帰国)、尹馨鉉(康津郡、帰国)、尹竹夏(康津郡、帰国)、尹項鉉(康津郡、帰国)、尹在萬(康津郡、帰国)、尹在春(康津郡、帰国)、張珉燮(康津郡、帰国)、金琮坤(昇州郡、捕虜帰国)、金承烈(昇州郡、死亡)、金大善(潭陽郡、死亡)、朴判洙(潭陽郡、銃殺)、宋亨植(潭陽郡、死亡)、林秉鎬(谷城郡、戦死)、宣萬永(谷城郡、捕虜帰国)、鄭吉采(靈岩郡、捕虜帰国)、高炫栄(長興郡、戦死)、金再東・金三東(求礼郡、捕虜帰国)、全順白・全六童(光山郡、生死不明)、曹萬基(光山郡、死亡)、金点洙(光州、捕虜帰国)などである。

提訴当時、ミリへの動員を明示した者もいたが、南洋への動員とする者もあり、被徴用死亡者連名簿や海軍軍属身上調査表の記載の調査によってミリへの動員であることが判明した者もいる。訴状や陳述書から動員の概要を知ることができる。

求礼の金再東と金三東、光山の全順白と全六童はともに兄弟でミリに連行された。全順白と全六童は海軍の個表では現地逃亡、米艦で帰還と記されているが、証言では行方不明のままである。逃亡・帰還と処理されているが、抵抗・脱出の際に殺害された可能性が高い。

李來秀の兄の李昌秀は、海軍軍属として徴用され、第4施設部に配属、ミリ島へ送られた。当時の日本名國本、22歳であった。その後、厚生省援護局長より「1945年3月18日、マーシャル群島ミレ島にて死亡」との通知を受けたという。海軍の身上調査表をみると、反乱により銃殺とされている。遺族には死亡と伝えて、銃殺であったことは知らせていない。

朴判洙の子、朴永龍は、父は満33歳で強制徴用され、南洋群島に送られた。消息は出発の時が最後で、南洋で死亡した。遺骨も受け取っていないと語っている。身上調査表では、反乱罪で銃殺とされている。

金琮坤の子、金孝貞は、父は1923年1月に出生、42年2月頃軍属として徴用され、ミリ島へ連行された。軍番1083、日本名金本であった。連行先での苛酷な労働下、父は逃亡しようとして失敗、嚴重に監視された。その後、捕虜となりハワイ収容所に送られ、解放後に帰国と話している。

尹項鉉の子、尹海成は、父が1914年8月に出生、徴用されてミリ島飛行場の建設場に連行された。当時の日本名伊村。連行先で苛酷な虐待を受け、草の根を食べてかろうじて生き延びた。解放後、帰国、心身共に衰弱が著しく、その後死亡したと語っている。帰国後も虐待や衰弱の後遺症により生活は困難だったのである。

鄭吉采（霊岩郡、光州在住）は1925年10月出生、42年3月労務者として徴用され、ミリ島飛行場建設現場へ連行された。連行先では苛酷な重労働であり、殴打され、食事は劣悪だった。アメリカ軍の攻勢により補給が断たれ、10か月、草や魚介類で命をつないだ。落ちたやしの実を朝鮮人が食べたことと日本人が殴ったことで、朝鮮人と日本人が喧嘩になった。その後日本人1小隊が銃を乱射、多数の朝鮮人が殺された。原告は米艦に逃げ、捕虜となった。ハワイに収容され、解放後、帰国したという。

鄭吉采は1991年に来日し、日本人と朝鮮人が闘争し、日本軍が機関銃で射殺したこと、そこで生き残ったことを証言している（「朝日新聞」1991年8月18日記事）。

曹尚鉉は父、曹万基が1942年2月に海軍軍属として徴用され、南方に送られた。42年11月頃に手紙が2回あった。解放後、徴用の同行者2名から、ミリ島にて死亡したと知らされた。死亡の経緯を知らせよ、遺骨を返せと訴える。

宣萬永（谷城郡）は陳述書で次のように記す。日本は天皇陛下への忠誠、内鮮一体、国體明徴、忍苦鍛錬などといって、皇国臣民の誓詞の朗読を強要させ、裕福で安定した生活ができると言葉巧みに騙した。夜、日本の警察官に逮捕され、その理由を訊く間もなく広い太平洋へと出航した。これを機に両親や兄弟、家族みながばらばらになってしまった。連行後は、毎日、防空壕掘りと飛行場での作業など過酷な重労働をさせられ、食事は1日2食の雑穀や欠食であり、空腹に耐えきれずに、草の根や木、野生のネズミやカエル、海の魚などを食べた。獣のような扱いを受けながら、毎日のように栄養不足による死者が出た。1945年5月頃、アメリカ軍により、南洋の島々を転々とし、温かい救済と同情を受けて生命を維持することができた。解放後、両親のおかげで結婚できたが、南洋群島で毎日過酷な重労働を強制されたため、その後遺症で帰国後も入院して治療を受けた。徴用されていた時の病が、最近再発し、脊柱の手術までした。老いていく身体であり、歩行さえもままならない。日本が戦争犯罪国であったことや国際法を守らなかったことを認めずにいるのは、非人間的である。これではいつまでも恨を晴らすことはできない（要約）。

（3）全羅南道からミリ環礁への強制動員

これらの研究、史料、手記や証言から、ミリ環礁での朝鮮人の強制動員についてまとめてみよう。

ミリ環礁はマーシャル諸島での日本軍の最前線に位置し、日本軍は環礁で最も大きなミリ島に3つの滑走路を持つ飛行場を建設した。砲台、宿舎、弾薬庫、格納庫、通信所、地下壕なども建設した。日本軍はその労働力として朝鮮人を徴用した。身分は第4施設部軍属（「工具」）であり、軍に徴用された労働者だった。

関係者の記録によれば、1941年12月下旬に海軍の施設部隊5301隊がミリ環礁に派遣され、施設部隊の増強のため、42年4月2日にぶらじ丸、4月6日にあるぜんちな丸、8月5日に平洋丸、

8月24日に香取丸、12月17日に千早丸が施設部隊員と資材を運んでいる。滑走路3本が完成した43年1月には施設部隊員数は2,200人を超えた。その後、移動して43年末に1,200人ほどとなり、敗戦時には600人ほどになった。隊員は1年の契約であったが、戦況から帰還延期とされ病気送還と事故者以外はミリに残留させられた(堤亨編『ミレー島戦編集録』7-12頁; 田中計三郎・服部勇五郎「ミレー島と設部隊」『ミレー島回想録集』38頁)。

ミリに動員された李仁申(長興郡出身)は「日帝強制連行 太平洋戦争 マーシャル諸島ミリ島受難記」の形でまとめた(『南方紀行』所収)。その証言では、1942年3月、全羅南道など3つの道から2,400人が海軍施設部の工員として出発した。あるぜんちな丸に乗船し、1,600人が他の島に下船し、4月初めに全羅南道の800人がミリ島に到着した。ミリの施設部の部隊での日本人工員は約80人であり、その下に朝鮮人が組み込まれた。朝鮮人は出身地別に40人で1班とされ、5つの班で1団が編成されたという。一つの団で200人になるから、全南出身者は4つの団に編成されたとみられる。ミリにすでに忠清南道からの動員者があり、飛行場建設がひと段落すると移動したという(堀内稔訳、『南方紀行』130頁)。

旧強制動員委員会は旧海軍軍属身上調査表からミリ関連で648件の動員者を確認している。それによれば、全羅南道が635人、その他が13人である。この調査では帰還者は433人、1942年から45年の死亡者は215人とされている。旧委員会による被害者認定は315件ほどという(『南洋群島ミリ環礁・強制動員朝鮮人虐殺の真相調査』日本語版2023年、31、36頁)。

筆者は2024年に真相調査のために「被徴用死亡者連名簿」(全羅南道、海軍分)から「ミリ環礁・強制動員死亡者名簿」(218人)を作成した。2025年には旧委員会調査を参考に、韓国の国家記録院のWebサイトから旧海軍軍属身上調査表を検索し、ミリ環礁死亡者名簿を訂正・補充し、逃亡者や帰還者を含む「ミリ環礁・強制動員者名簿」(640人分)を作成した。この動員者名簿では、635人が全羅南道出身であり、5人が他の道の出身である。名簿の作成から全羅南道の16の市郡、50か所以上の面から集団動員されていることがわかる。

主な動員郡・面は以下である。

潭陽郡では潭陽邑、鳳山面、金城面、昌平面、古西面、水北面、大田面、月山面、武貞面。光山郡では孝池面、大村面、極楽面。光州市。羅州郡では文平面。務安郡では押海面、安佐面。靈岩郡では金井面。海南郡では門内面、山二面、花源面。康津郡では郡東面、道岩面、城田面。長興郡では長興邑、安良面、冠山面、蓉山面、大徳面。宝城郡では福内面、会泉面、文徳面。高興郡では南陽面。順天郡では順天邑、双岩面、住岩面、上沙面、楽安面、松光面。光陽郡では多鴨面、玉谷面、津月面、津上面。和順郡では北面、二西面、同福面。求礼郡では求礼面、光義面、山洞面、龍方面。谷城郡では三岐面、兼面、梧山面。

配置された日本軍の概要と自活のための分散、敗戦時の人員などは次のようになる(『ミレー島戦編集録』; 「ミレー島と設部隊」『ミレー島回想録集』)。

1943年12月時点でのミリ環礁に配置された日本軍は、海軍は第66警備隊や航空隊が約1,870人、施設部隊が約1,260人の約3,130人、陸軍は歩兵第122連隊、107連隊、山砲兵第16連隊、工兵第52連隊など約2,520人である。陸海軍で5,700人ほどとなる(『ミレー島戦編集録』43頁)。島民は約500人がいたから、島の総人員は6,000人を超えた。43年12月に輸送船南海丸はミリでの荷役

中に空襲で沈没し、44年の3月と6月には潜水艦による補給があったが、わずかな量だった。

日本軍への補給は途絶え、アメリカ軍の攻撃は激しくなった。そのため日本軍は1944年6月からはミリ本島から環礁の島々に分散しての「現地自活」を強いられた。施設部隊はルクノール島、チルボン島、エアニシナ島、ナーギリック島（環礁）などに分散させられた。さらに44年8月にはアメリカ軍の大空襲により、第2次、第3次の離島分散がなされた。分散者への支給は皆無となり、本島残留者への主食支給は8割減となった（『ミレー島戦編集録』76, 78頁；「ミレー島と設部隊」39, 42-44頁）。

アメリカ軍は上陸せずに空襲を繰り返し、艦砲射撃もおこなった。アメリカ軍の主な空襲には1943年11月、44年1月、2月、8月などがあるが、断続的になされた。44年12月からはナパーム（油脂）爆弾を使用して食糧を焼き払うようになった（「ミレー島と設部隊」40, 41頁）。それによりミリでは1944年末から45年にかけて栄養失調による死亡者が多発した。アメリカ軍は空襲を繰り返しながら、逃亡や投降を呼びかけた（『ミレー島戦編集録』84, 90頁）。アメリカ軍機の撒いたビラには捕虜になった朝鮮人軍属が載った「ライフ」誌や手札型の写真などがあった（『ミレー島回想録集 平和の鐘鳴る島』50頁）。

1945年8月の敗戦を経て、9月28日に氷川丸で帰還する際の乗船者は陸軍991人、海軍1,599人（うち施設隊602人）の計2,590人だった。43年12月に日本軍は5,756人ほどであったが、戦死者・行方不明者の数は3,154人となった。空襲や飢餓により半数以上が戦死や行方不明になるという状況であった。日本軍降伏後、ミリ残留の日本軍は氷川丸に乗船し、10月8日に浦賀に上陸した（『ミレー島戦編集録』107頁；「ミレー島と設部隊」45頁）。

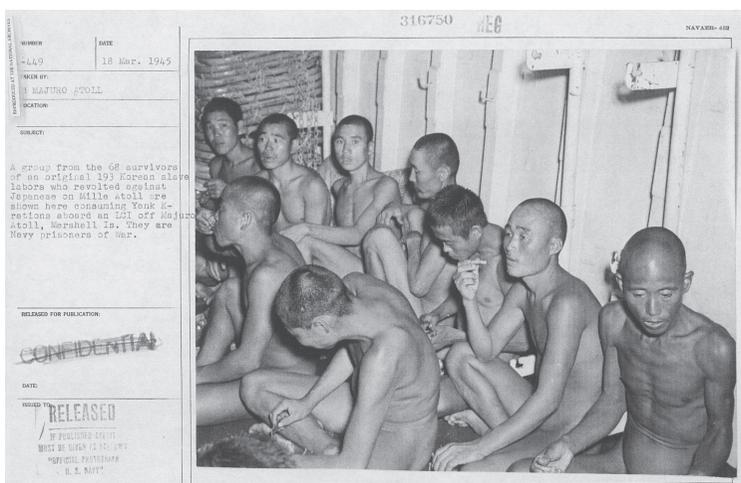
（4）チルボン島での朝鮮人軍属の抵抗・脱出

朴鍾元の証言によれば、食糧が不足するなかで日本軍はミリ環礁の島々へと分散配置をおこない、離島のチルボン島へは日本人11人、朝鮮人約180人の1団が分散させられた。1945年に入り、日本兵が「クジラ肉」を朝鮮人軍属に出した。その後、殺されて肉を削がれた朝鮮人軍属を発見、その肉が朝鮮人に出され、次はわが身と考え、朝鮮人は抵抗しての脱出を計画した。計画は実行され、日本人7人を殺害したが、逃走した者がいた。翌日、5～6キロメートル先のルクノール島から日本軍が襲来した。朝鮮人は機関銃の攻撃をうけ、銃殺された者、追い込まれて自死を強いられた者がいた。マーシャル人も朝鮮人と共に戦ったが、女、子どもまで殺された。日本軍は朝鮮人を100人、マーシャル人を30人ほど殺した。この混乱の中で朴鍾元も含め、脱出に成功した朝鮮人がいた。朴は解放後ハワイから帰郷できたが、戦禍の残虐な幻像などに苦しむ生活を強いられた。

朴鍾元の証言では、抵抗開始日は1945年の2月28日の夜、3月1日の前日である。

海軍軍属身上表には謄写版印刷で、第4施設部ミレー派遣隊現場主任中川清人（海軍技術大尉）の報告が記されている。銃殺された者については次のようにある。

18年末より物資の補給絶え19年6月食糧皆無となる。「ミレー」防備隊指揮官命令により「ミレー」防備隊員4分の3を環礁内各島（ミレー本島を除く）に現地自活のため分駐。麻田技手を隊長（日本人工員14名、半島工員184名）とする一離島で20年3月18日隊長及日本人工員を殺害逃亡の目的で反乱を起し、翌日本島より討伐隊を派遣に際し「叛乱銃殺」。4艦隊で反乱罪で処置せられた。



【写真3】左方欄には“68 survivors of an original 193 Korean slave labors who revolted against Japanese”との記載

自死を強いられた者はこの「叛乱銃殺」の欄が「叛乱自決」となっている。脱出に成功したとみられる者については「叛乱逃亡」と処理され、さらに上部に次のように記されている。

アメリカ軍の沿岸監視艇及び哨戒機に白旗を振って島を離脱し近接の米艦視船に収容され終戦後送還されたと思う。(米艦収容まで溺死することはないと思うが自決・事故死のものが皆無^(ママ)とは言へない)

この逃亡についての追加記入は1952年7月4日である。45年10月7日に氷川丸で帰還したと処理された後の記載である。

中川清人は18日に反乱を起こし、翌日に討伐して銃殺したとするが、身上調査表では銃殺や自死の日付が3月18日となっているから、「討伐」の日は18日とみられる。朝鮮人が決起した日は18日ではなく、17日であろう。

神村繁国は『マーシャル諸島ミレー島戦記』の3月20日の記事に「設部隊の逃亡事件の、どさくさで水道の渡し杜絶 為に、飲水来らず、困却」と記している(63頁)。この記述はチルボン島での朝鮮人の反乱事件を示すものであろう。

アメリカ軍が救出した際に撮影した写真(【写真3】)には、脱出した朝鮮人軍属の写真の横に“revolted against Japanese slavery”(日本による奴隷状態に対して反乱した)、“68 survivors of an original 193 Korean slave labors who revolted against Japanese”(日本人に対して反乱を起こした193人の朝鮮人奴隷労働者のうち68人の生存者)などと記され、救出日は3月18日となっている。この68人は反乱により18日に米艦に救出された際の数とみられる。

The Voice of Korea (1945年11月5日)での“Koreans battled Japs on Mille”(ミリの朝鮮人の日本軍との戦闘)の記述は、救出された際の写真を解説する内容である。それによれば、3月17日に抵抗が始まり、日本軍が弾圧、18日に生存者が救出された。抵抗した朝鮮人約190人のうち救出された者は67人とする。

救出数がアメリカ軍の写真では68人、この記事では67人と差があるが、アメリカ軍が脱出の工作をすすめるなか、朝鮮人の抵抗が3月17日からはじまり、日本軍の弾圧を経て、18日に70人弱が脱出できたとみていいだろう。

決起の理由は、エルソン・エベルの証言では朝鮮人の処刑、朴鐘元は朝鮮人の殺害とその肉の供与とするが、確定するには資料が足りない。日本軍による奴隷化と虐待の中での決起であったとみることはできる。

ミリ環礁に連行された李仁申（長興郡出身、東森仁州）は「日帝強制連行 太平洋戦争 マーシャル諸島ミリ島受難記」でチルボン島での抵抗について記している。そこで李は、チルボン島での虐殺に対し、「人間への差別、抑圧、殴打、過酷な強制労働、ことばでは言いつくせない恥辱と蔑視を受けて、数多くの死線をみんなで乗り越えてきた仲間」、「本当にかわいそうな仲間たちだ。チルボン島の同志たちは不義に対抗する気高い闘志で、私たちみんなに代わってやむをえず闘い、虐殺され、非業の死をとげた。彼らは命をすてて忠義を守った同志たちだ」と記す（『南方紀行』172-173頁）。

チルボン島での抵抗者で逮捕された者はルクノール島に連行され、銃殺された。李仁申や邊漢権（長興郡出身）はルクノール島にいたことから仲間が殺される状況を知りえた。その後の45年6月、李仁申はルクノール島から脱出に成功した。

李仁申は1995年に動員された朴鐘元、邊漢権と遺族の高允錫とミリ環礁を訪問、ルクノール島やチルボン島にも行って追悼行事をした。そこには元海軍の金丸利実、元陸軍の末村良雄も参加した（『南方紀行』207-212頁）。関西テレビはその活動を撮影し、「飢餓戦線の果てに 南の島の60年目の証言」（徳永俊彦制作）の形で放映した。

旧委員会はミリに動員された朝鮮人海軍軍属を身上調査表で648人分（全羅南道635人分）を確認しているが（『南洋群島ミリ環礁・強制動員朝鮮人虐殺の真相調査』日本語版36頁）、動員者を800人とすれば、150人ほどが欠落していることになる。また旧委員会はこの事件での生存は95人、死亡は55人（銃殺32人、自決23人）とし、抵抗参加数は150人とみる（同書、日本語版31-35頁）。ここでの生存数は逃亡と処理されているが自死などに追い込まれて死亡した者を含むものである。

先に示した式場隆三郎『地獄島 兵士の敗戦記録』には、チルボン島での朝鮮人の暴動で130人が死亡、さらにチャパノール島、バル島にいた朝鮮人70人が逃亡気配を理由に銃殺されたと記されている。海軍軍属の身上調査表にはこの70人の処刑に関する記事はない。式場の本の記述によれば、この時期の銃殺などでの朝鮮人死者を200人とすることもできる。

木村喜左エ門は『ミレー島戦私記』で、アメリカ軍は逃亡した朝鮮人からアメリカ兵の処刑の顛末と処刑場所の情報を得ていたと記す（118頁）。逃亡の監視の強化は情報漏洩を止めるだけでなく、戦争犯罪を隠すためでもあったが、それはできなかった。この反乱により日本軍は動員朝鮮人の監視をより強化したと考えられる。

チルボン島での抵抗は次のようにまとめることができる。

1942年3月、全南各地から800人が海軍の労務者として集団動員され、第4施設部隊員として4月初めにミリ環礁に到着した。アメリカ軍の攻撃と飢餓のため44年中頃、ミリ環礁の島々への分

散がなされ、チルボン島には朝鮮人 190 人弱が移動させられた。解放を求めて 45 年 3 月、潭陽郡出身者を中心に脱出の闘いに立ちあがり、弾圧を受けたものの、70 人ほどが脱出に成功した。その際の死亡者は 100 人以上とみられる。

なお、ミリ環礁では日本軍の支配に対して先住のマーシャル人も抵抗している。チルボン島では島民が朝鮮人とともに抵抗し虐殺された。ミリのエネゼット島では食料の略奪に島民が反乱を起こして日本軍に弾圧される事件が起きたという（「西日本新聞」1985 年 9 月 3 日：『ミレー島戦編集録』190 頁）。ミリ環礁の島々でのマーシャル人の抵抗実態の調査が求められる。

(5) 潭陽・霊岩での現地調査

2024 年 6 月 8 日、筆者作成のミリ動員者死亡者名簿を手がかりに日帝強制動員市民の会と全羅南道の潭陽と霊岩で現地調査をした。

光州の北部にある潭陽ではミリでの死亡者の金基萬（1923 年 6 月生）の甥の金貴男（86 歳、1938 年 4 月生）と会うことができた。金基萬の父は金光五といい、長男が萬石、その下に弟が 3 人と妹が 1 人、末の弟が基萬である。貴男は萬石の子で、基萬は叔父にあたる。

金貴男は次のように話した。祖父の光五は農業をしていた。叔父の基萬の死については聞いたことがない。南洋に行ったという話だけだ。祖母（李若任、基萬の母）は 90 歳まで生きたが、南洋から 1～2 年の間は手紙が来て、時に送金もあったが、換金せずに持っていた。死亡は知らされていない。解放後も帰ってこなかったが、うまく生活できているのだろうと思っていた。やっと消息が分かった。

貴男の話は息子が経営する餅屋で聞いた。貴男は持っていた土地に加えて土地を借りて 30 年ほどグリーンハウスを経営し、パパイヤとトマトを生産して暮らしてきた。叔父の基萬が抵抗の闘いに参加し、自死を強いられたという話は初耳だったという。近くに生家の跡があり、路地の土壁は 80 年前のままの形で残っていた。日本の統治期、若かった基萬もこの路地を駆け抜けて育ったのだろう。

潭陽は平地が多く、土壌もよく、農業に適している。今もイチゴ、メロン、ミニトマトなど近郊農業が盛んだ。竹製品の産地としても知られている。歌辞（カサ、長詩）の文化が生まれた土地柄であり、歌辞文学館がある。

農業と文学の伝統は抵抗の精神の基礎となり、植民地下でも解放への運動が取り組まれたのだろう。潭陽出身者が中心になっての 1945 年 3 月のミリでの脱出に向けての闘いもこの風土が育んだように思われた。

霊岩は羅州の南に位置し、西には木浦がある。霊岩の南には月出山があり、霊岩はその麓になる。月出山は「湖南の小金剛」ともいわれ、岩峰が陰しく連なっている。その姿は全羅道民の反逆の心性を示すものとみなされる。霊岩郡金井面からはミリに 30 人ほどが集団動員されて 8 人が死亡している。

霊岩の金井面の地は小山が多く、その間に農地が広がっている。霊岩の特産はイチジク、梨、サツマイモ、韓牛、柿などである。現地の農民組合の仲間が農業用トラックで先導して巡った。光州から運転してきた市民の会の李国彦も熱心に動く。ここは地元、霊岩の金井小学校を出て、知人も

多いという。

ミリで亡くなった李宗千の生まれた連宝里の地は現在では柿畑になっていた。月坪里の松原甲哲の生地には別の家族が住んでいた。武田正洙の出身地は山に囲まれた青龍里であるが、今は竹林と畑地になっていた。親族が浮島丸事故から生還したと語る農民もいた。臥雲里は清州正業が生まれたところであるが、番地は何軒かで分割されていた。

金井面からの動員者のうち4人が1944年6月2日の戦死とされている。アメリカ軍の攻撃で共に命を失ったとみられる。直接の手掛かりはなかったが、現地を回りながら80年前の強制動員の状況を考えることができた。

霊岩からは南方のタラワ、サイパン、パラオ、ニューギニア、フィリピンなどにも連行されている。北方の大湊施設部に連行され、帰国途中に浮島丸事故で亡くなった人もいる。日本各地の炭鉱や工場に連行された人々もいる（「被徴用死亡者連名簿」,「光州千人訴訟資料」）。地域から強制動員の実態について把握していく作業が求められる。

おわりに

植民地支配下、民族性を奪っての強制的な動員がおこなわれた。南洋マーシャル諸島のクェゼリン環礁への1942年2月以降、ミリ環礁への42年3月の動員が確認できる。戦争の前線である南太平洋へと日本軍の労働力として動員したのである。そこでの移動の自由はなく、逃亡は銃殺とされた。クェゼリンでは日本軍とともに集団死（「玉砕」）を強いられた。ミリやウォッジェでは飢餓に追い込まれた。そこでは人間の肉を食べる事件も起きた。ミリ環礁チルボン島での抵抗、脱出の試みは、弾圧による銃殺や自死を強いられ、「反乱罪」として処理された。その歴史は隠蔽されたまま、その責任は取られていない。実態は十分に解明されないまま、80年が過ぎた。

今後の課題をあげれば、まず第1に真相究明が求められる。資料収集が必要であり、動員実態の調査が求められる。動員された人びとの本名を明らかにしたい。第2に名誉回復が求められる。45年3月のミリ環礁での抵抗は、奴隷状態からの解放を求めた闘いであり、その参加者の名誉の回復が求められる。日本軍による動員と飢餓の下での虐殺であり、真相究明とともに遺骨の収集や謝罪、賠償も必要である。そして第3に記憶の継承である。その歴史を記し、追悼・祈念する活動が必要である。

2023年12月、マーシャル諸島の南方、ギルバート諸島のタラワでの強制動員死者、崔炳連（日本名内本炳連、霊光郡弘農面）の遺骨が返還された。遺族がDNAを提供し、遺骨の返還を求めていたことから実現した。このような遺骨の返還も尊厳の回復のための活動である。

旧強制動員委員会の調査報告書には1945年3月の抵抗事件の死者55人が示されたが、姓名の一部と郡名だけであり、全南現地で調査をすすめる資料としては不十分なものであった。筆者は2024年に「ミリ環礁・強制動員死亡者名簿」（218人）を作成し、25年には「ミリ環礁・強制動員者名簿」（640人分）を作成し、光州で記者懇談会や市民集会を持った。25年8月、全羅南道はミリ環礁強制動員の真相調査をすすめる意向を示した。この動員者名簿によって真相調査がすすむことを期待したい。

強制動員については、真相の究明、尊厳の回復、記憶の継承が不十分なままである。強制動員問題は未解決であるにも関わらず、「日韓請求権協定で解決済み」などとする主張は、被害者・遺族にとって国家による暴力であり、植民地主義の継続である。被害者の尊厳回復の視点を大切にすべきである。戦争被害を回復する仕組みは戦争防止の力となりうる。

マーシャル諸島では日本軍による先住のマーシャル人への強制労働や殺害、アメリカ軍捕虜の殺害事件が起きている。ミリ環礁での朝鮮人の抵抗はマーシャル人とともにあったという視点も重要である。日本敗戦後には、アメリカはマーシャル諸島を支配し、核実験を繰り返し、深刻な核汚染を起こした。マーシャル諸島は独立したが、政治的、経済的に清算すべき課題は多い。これらの問題を含めて植民地主義への抵抗とその継続を問い、植民地主義をただす活動が必要である。それは現代の課題である。

(たけうち・やすと 歴史研究者)

附記：厚労省社会・援護局から国立公文書館に移管された文書については、西山直志「国立公文書館所蔵の海軍人事関係等資料の検索手段」(『北の丸』57号、国立公文書館、2025年)に移管資料に関する紹介がある。この論文には「戦没者等援護関係資料」の全体像、行政ファイル管理簿における海軍人事関係等資料、海軍人事関係等資料の構造、「海軍軍人履歴原表」一覧表、「海軍軍人軍属死没者原簿」一覧表、「海軍軍人功績調査票」一覧表、「海軍戦没者調査票」一覧表などの表が含まれ、援護関係資料の構成を知ることができる。

移管された文書には、この論文で紹介した「半島工員ケゼリン・ルオット玉砕者名簿」、「半島工員大宮島玉砕者名簿」、「ミレー島」(海軍戦没者名簿)、「四施生還者関係」のように朝鮮人の記載が含まれているものがある。筆者は他に芝浦施設部・第4施設部関係名簿、隧道隊関係名簿、横須賀関係の供託名簿、陸軍の死亡者連名簿(朝鮮人分)などを閲覧したが、その紹介は別稿としたい。

朝鮮人関連の主な援護関係書類は厚労省社会・援護局に保管されたままであり、国立公文書館には移管されていない。朝鮮人分についても移管がすすめられ、公開されることが望まれる。なお、筆者は社会・援護局に対して保管している朝鮮人分の簿冊件名について情報提供を申請し、2025年8月に保管文書の概要の提供を受けた。

【参考資料】

「被徴用死亡者連名簿」(「旧日本軍在籍朝鮮出身者死亡者連名簿」) 厚労省社会・援護局資料、韓国・国家記録院蔵

「海軍軍属身上調査表」厚労省社会・援護局資料、韓国・国家記録院蔵

「半島工員ケゼリン・ルオット玉砕者名簿」厚労省社会・援護局移管、国立公文書館蔵

「半島工員大宮島玉砕者名簿」厚労省社会・援護局移管、国立公文書館蔵

「ミレー島」(海軍戦没者調査票、3冊) 厚労省社会・援護局移管、国立公文書館蔵

「四施生還者関係」厚労省社会・援護局移管、国立公文書館蔵

「中部太平洋マーシャル諸島戦闘詳報」陸軍歩兵第122聯隊第1大隊、南洋第1支隊第1大隊、防衛省蔵、国立公文書館アジア歴史資料センター

「グアム島各海軍部隊戦闘状況」グアム島海軍部隊残務整理班、1947年

「ケゼリン・ルオット両島の陸海軍部隊玉砕」NHK日本ニュース196号、1944年3月1日検閲合格、NHKアーカイブス

『日本人の海外活動に関する歴史的調査 通巻第10冊 朝鮮編9』大蔵省管理局、1950年

「ミレー島」アメリカ国立公文書館資料(U.S. National Archives. Naval Photographic Center)、『方善柱寄贈太平洋戦争期写真資料』韓国国史編纂委員会・電子史料館

<https://archive.history.go.kr/> AUS277_02_00V0006

「タラワで負傷した朝鮮人労務者」同上, AUS277_02_00V0004_004
「Pow's physically present within this Command」(捕虜名簿)『Maleolap 1945-1948』(マーシャル・ギルバート地域アメリカ海軍文書 89～91 枚目), アメリカ国立公文書館資料, 韓国国史編纂委員会・電子史料館, AUS021_09_00C0008, 107 枚目はミリで虐殺された先住民名簿
「ハワイ収容者名簿」『自由韓人報』第7号付録, 1945年12月
「ウオツゼ・マロエラブ・ミレー及びジヤルートに対するアメリカ軍の作戦」米国戦略爆撃調査団報告, 1947年, 航空自衛隊幹部学校訳 1960年
戦史叢書13『中部太平洋陸軍作戦2 ペリリュー・アンガウル・硫黄島』防衛庁防衛研究所戦史部, 朝雲新聞社, 1968年
戦史叢書62『中部太平洋方面海軍作戦〈2〉——昭和17年6月以降』防衛庁防衛研究所戦史部, 朝雲新聞社, 1973年
「アジア太平洋戦争韓国人犠牲者補償請求事件訴状」1991年
「在韓軍人軍属裁判資料」太平洋戦争被害者補償推進協議会蔵
「太平洋戦争犠牲者光州遺族会資料」日帝強制動員市民の会蔵
「証言記録 兵士たちの戦争 飢餓の島 味方同士の戦場 金沢 歩兵第107連隊」2009年11月9日, NHKアーカイブス

【参考文献】

尹ジョンイル・金銀植「太平洋戦争末期, マーシャル諸島の日本軍の現況と朝鮮人軍属の実態 ミリ島朝鮮人虐殺事件を中心に」民族問題研究所, 2007年
李共石「歴史の裏側から マーシャル群島ウオツゼ島での九死に一生」『南方紀行』韓国・日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会, 2008年, 日本語版 2025年
李仁申「日帝強制連行 太平洋戦争 マーシャル諸島ミリ島受難記」『南方紀行』同上
李世日『ハワイ収容所における韓人捕虜に関する調査』韓国・強制動員被害真相糾明委員会, 2008年, 日本語版 2019年
曹健「南洋群島ミリ環礁で虐殺された強制動員朝鮮人に関する真相調査」対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会, 2011年, 日本語版『南洋群島ミリ環礁・強制動員朝鮮人虐殺の真相調査』2023年
曹健「アジア太平洋戦争末期ミリ環礁動員朝鮮人の抵抗と被害」『崇実史学』47, 2021年
黄棟俊「タラワに残された韓国人犠牲者との出会い」『日帝強占下強制動員犠牲者遺骸奉還に関する国際シンポジウム資料集』日帝強制動員被害者支援財団, 2020年
セロン・J・ライス (Theron J. Rice) “Koreans battled Japs on Mille,” *The Voice of Korea*, Korean Affairs Institute, 1945年11月5日. 韓国・国立中央図書館蔵, <https://www.nl.go.kr/>
リン・ポイヤー, スザンヌ・ファルグート, ローレンス・マーシャル・カルッチ (Lin Poyer, Suzanne Falgout, Laurence Marshall Carucci) 『戦争の台風 太平洋戦争でのミクロネシア人の経験』ハワイ大学出版, 2000年
オカ・デスン (Oka Desun) 「ミリ環礁の蜂起と虐殺に関する歴史的保存評価」カリフォルニア州立大学修士論文, 2024年,
<https://scholars.csus.edu/esploro/outputs/graduate/Historic-preservation-assessment-of-the/99258173162401671>
マイク・クリウド (Mike Krivdo) 「フロントロック作戦, マーシャル諸島侵攻, 1944年1・2月」U.S. Army Pacific, 2024年, <https://www.usarpac.army.mil/>
マット・ヴァンボルケンバーグ (Matt VanVolkenburg) “The March 1945 revolt of Korean forced labourers against Japanese on Mili Atoll” <https://populargusts.blogspot.com/>
式場隆三郎『地獄島 兵士の敗戦記録』文苑社, 1946年

木村喜左エ門『ミレー島戦私記』1973年

ミレー島回想録集「平和の鐘鳴る島」編集委員会編『ミレー島回想録集 平和の鐘鳴る島』1976年, 田中計三郎・服部勇五郎「ミレー島と設部隊」, 末村良雄「ミレー島夜話」等を収録

堤亨編『ミレー島戦編集録』1988年

稲毛三郎『飢餓の島 ウ島戦夢物語』ウオッセ島文通の会事務局, 1987年

北島秀治郎「ウオッセ島の惨状」『思い出 海軍と人と海軍主計科短現7期文集』1988年

神村繁国『マーシャル諸島ミレー島戦記』1993年

ミレー島慰霊団「第14次ミレー島慰霊行」2001年

佐藤和正『玉砕の島』光人社, 2004年

土屋太郎『ウオッセ島 籠城六百日』潮書房光人社, 2012年

西山直志「国立公文書館所蔵の海軍人事関係等資料の検索手段」(『北の丸』57号, 国立公文書館, 2025年)

竹内康人『調査・朝鮮人強制労働③ 発電工事・軍事基地編』社会評論社, 2014年

竹内康人『戦時朝鮮人強制労働調査資料集2 増補改訂版』神戸学生青年センター出版部, 2024年